

## 豊かな人間性を目指して

——“見えないもの”の不思議な力——

吉田実盛

みなさんこんにちは。今、松井先生から非常に丁寧に紹介をいただきました、吉田といいます。「初めまして」でいいでしょうか？ 実は今年六月に「こども保育学科」で授業を一回だけさせていただきました。受けて下さった方ありますか？ あればちよつと手を挙げてみてください：ありませんね。みなさん初めてなのでやりやすく良いです。

今日は「宗教講座」ということで呼んでいただきましたが、光華のみなさんは、宗教家になるとか、宗教学者になるとかいう方はあまりいらつしやらないと思いますので、普段、私が比叡山で教えているような内容はいつさい今日は持つてきておりました。

ん。むしろ、普通の生活の中でこんなことを考えられたらいいなと思っている内容（先生方もたくさん座っておられるのは分かっているので誠に恐縮ですが）学生さん相手にお話しを進めてさせていただきます。

まず初めに、さつき、みなさんが大きな声で歌っていただいた学園歌の冒頭に、「仰ぎ見る比叡山」って歌詞が出てきましたよね。その比叡山の麓にある叡山学院という所に行っています。その学生は全部お坊さんです。すでに得度というのをしている学生とちゃんと聞いている者たちが来ています。ですが、授業はちゃんと聞いている学生とちゃんと聞いていない学生があります。寝ている学生もあります。それは私のやり方が悪いのだろうかいつもそのように思っています。人が人と接する時に、興味があることについてというのはみんなほっといてもそちらへ近寄っていきますよね。興味がないことはだんだん逃げていきます。それは当たり前なのです。だから今日は、みなさんが嫌々来てくださったのか喜んで来てくださったのかそれは分かりませんが、とにかくここに来ている以上、ここからみなさんがちゃんと聞くかどうかは私にかかっているわけです。みなさんが終わった後で、「まあ、来て良かったか」程度に

豊かな人間性を目指して

思っていただけのような話をしたいと思っていますので、よろしくお付き合いいただけますかと思えます。

自己紹介をちよつと続けます。私と京都光華女子大学との関わりです。私自身は寺の息子として生まれました。そして、小学校の頃に得度をして坊さんの資格を持っているのですけれども、その後、先ほどご紹介いただきましたように、龍谷大学に進んで仏教の勉強をしました。先ほど学長先生の部屋へ入れていただいて、学長先生に聞かれました。「あなたは仏教の勉強をしておるのに、保育の先生方と繋がりがあつたのは珍しいね」と、こういうふうに言われました。兵庫大学に就職して、子どものこととか、幼児教育のこと、一から、自分で勉強しなくちゃ学生に話せない、そういう状況の中で科目をもつていくようになってきました。そこで大事に思つてきたようなことが、今日のお話の内容となつてきます。

その授業は、仏教の社会への影響、特に子どもたちが仏教に触れるということが、どれくらい大事なことなのかということをお伝えしていくのに役立つような科目をもつてきたわけです。そうしてました所、兵庫大学にいらした知り合いの先生方が、

京都光華女子大学に移っていらした。そうして「ここで授業を持たないか」というお話しをいただいて、現在は一年に一回だけ寄せていただいております、去年度は一月末頃に寄せていただきました。今年については先ほど、「手を挙げてください。どうですか?」と聞いたんですが、前期の六月に「こども保育学科」で授業を既にさせていただきました、仏教保育の話聞いていただきました。短大部での特別講師はどのように続けさせていただいてきているわけです。そんなこんながある中で、私は父を亡くしました。そして兵庫大学を辞めることになりました。辞めていつて今現在思うことは、学生さんから、みなさんからいろいろな事を教わったなあというふうに思っています。学生の考えていることというのは非常に純粹です。みなさん本当はどう思われているのかわかりませんが、私から見ると純粹ですよ。面白いことには大変反応してくれるし、面白くないことや自分のアンテナに合わないことはそっぽを向いていくし。そういう意味では私たちはちゃんとそれに向き合わないといけないなあ、勉強させてもらったなと思っています。それが今現在の叡山学院での授業にいかされようとしているんだと自分に言い聞かせて、大学へ参っているということになります。

豊かな人間性を目指して



次ですが、昨日、お釈迦様のお悟りになった日だということはみなさんにご承知でしょうか。たぶん光華でも成道会というのがあったと思います。うちの寺でも成道会をしました。たくさんのお寺さんや仏教系の大学でも成道会というのをしています。今日が成道会の次の日になりましたので、どんなお話しをさせていたどうか、お釈迦様の悟りを得られたという浄土についてお話しをしようか、あるいは仏教の教えについてお話ししようか、ということをいろいろ考えましたが、自由な話の中から周りまわって、あ、そういうのが仏教なのかということが分かるようなお話しをしようというふうに思ったわけです。そこでまずとつかかりに、こんなクイズをしてみたいと思います。足跡を見てください。

Aの地点から順番にずっと歩いていった足跡が残った。そこで問題です。「線の一步前はどこですか」みなさんはどう答えられますか。まず線の上の「C」という人はいらっしやらないと思います。「A」も「E」も二歩手前であったり二歩過ぎた所だったりしますので違いますね。聞

きますとたいがいですが、六割か七割くらいが「D」と答えられるはずですが、三割くらいが「B」と答えられるはずでは正解は…と言いますと、答えは「B」と「D」の両方なんです。この意味はお分かりになりますか。線を越えて一歩右足が前に出ているのはというと「D」になります。一方、線に入る一手歩前はというと「B」にならなきゃいけない。言葉の意味の違いはお分かりになりましたか。「一歩手前」というと「B」。で、「C」に入る。そして「一歩前」に出れば「D」になる。よって、この言葉はどのように発音するか、読み聞かせるかによって大きく意味が違ってくる。発音して読むと答えは「B」と「D」の両方にはなりませんよ。ちゃんと読んだ時には答えは一つになります。線の「一歩前はどこですか」というと、答えは「B」ですね。線の「一歩、前はどこですか」というと、答えは「D」です。というふうに発音すると指定されるものなのに文章に書くと答えが二つも出てくるという場合があるということを、今お話し申し上げたわけです。

次ですが、「後」という字の反対語となる漢字を挙げてください。答えは「前後」の「前」と、「先後」の「先」、二つになります。(女子学生さんが多いので将棋とか

豊かな人間性を目指して

囲碁はあまりなさらないと思いますが)将棋とか囲碁をする場合には「先手」とか「後手」とか。「先」と「後」というのは反対語の関係になりますし、「前」と「後」も反対語の関係になります。さて、それを踏まえてその次に進みますが、これにどれくらいの時間でもいいんです。例えば一年でもいいし、一週間でもいいし、三日でもいいし、とある時間、時の長さを上にかぶせると不思議なことが起こってきます。どんな不思議なことかというのを読んでみていただいたら分かると思います。例えば「二十分」をいれてみましょう。二十分前、二十分先、二十分後と読んだ場合に、どんな意味になりますか？二十分先と二十分後とは同じ意味になりましたね。「先」と「後」は反対の関係だったのに、二十分先も二十分後もまだ来ていない未来の時間を指す言葉になりますよね。一方、「前」と「後」は反対語の関係を保っています。二十分前というのは過去だし、二十分後というのは未来のことだし、関係を保っているのですが、「先」と「後」というのは反対語の関係を保てなくなりました。これは何故だろうと考えた時に、私なりに無理矢理理屈を付けると、たぶん人間は考えるという行為を行う際に「思考の方向」を持っているんだろうということです。時間の流れに

ついても方向性を持つて考えているんだらうとお話ししたら納得してもらえるかもしれません。つまり、過去のことを思いだそう、思いだそうとしている時には、過去を前に見て、何分前、何時間前、どれくらい前にこんなことがあったなというように、自分の思い出を前に描こうとする。その時に未来というのは後ろに、これからやってくるんだというように、何分後に想定するんだらうと思います。ところが、私が将来どうなっていくかと未来の事を考える時に、人間は「思考の方向」というものを変えるのではなからうか。そうすると未来は何分先にやってくる、何年先にやってくる、というふうに分前に見えるとなるのではなからうか。こう説明したらみなさんは納得していただけますか？ともかく言いたいことは、私の「思い」というものが、あっち向いたりこっち向いたり、いろいろする可能性があるのかもしれない。一歩前という文字を見た時でも、「一歩手前」という意味か「一歩、前に出る」という意味か自分の気持ちの捉え方でいろいろ解釈することができるのかもしれない。それだけ自分の「思い」というものは、たくさん、いろんな解釈をする可能性を持っているのだということをお願いしたい例として、ここに引用したわけです。



豊かな人間性を目指して

次の話に移ります。今からいくつかの詩をご紹介します。金子みすずという詩人の作品をいくつか紹介しますが、三月十一日に起こった東日本大震災の後、テレビの企業CMがパタッと消えた時期があるのをみなさん覚えていますか。どの番組を見てもどのチャンネルを合わせても同じようなACのコマーシャルが繰り返し繰り返し流されていた時期に流れていたコマーシャルは三種類か四種類あったと思います。「あいさつをしましょう」ぽぽぽーんって言うていたコマーシャルもありました。それ以外のコマーシャルもいくつか流れていたうちの一つ、それがこの金子みすずさんの「こだまでしょうか」という詩です。

「こだまでしょうか」

「遊ぼう」っていうと

「遊ぼう」っていう。

「ばか」っていうと

「ばか」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「もう遊ばない」っていう。

そうして、あとで

さみしくなって

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、

いいえだれでも。

これが詩の全文です。これはこだまですか？ 違いますよね。これはたぶんですが、友人のことだと思っうんですが、人間関係を言っているもので、自分が遊ぼうというと、友達は遊ぼうっていう、バカっていうと、相手も怒ってバカって返してくる、もう遊ばないっていうと、相手も遊ばないっていう、そうして後で寂しくなって、ご

豊かな人間性を目指して

めんねっていうと、相手もごめんねって寄り添ってくる、「こだまでしょうか いいえだれでも」で終わっています。友達との関係を述べたものです。私は六月の「こども保育学科」の授業でこれを取り上げさせていただいて、このように言いました。こだまをするということは大変大事なことだと、この金子みすずの記念館が山口県の仙崎にあるんですが、その館長を務められている矢崎節夫さんという方が講演でおっしゃっておられました。この話は大変印象深くて、「私たちは大概こだまをしないんです。それはどんどんどん時間の流れが速くなって、どんどんどん人間が賢くなると、こだまをしなくなる。」ということかと言いますと、幼児保育の具体例を挙げますと、公園で子どもが遊んでいるとします。お母さんがそばでベンチに座って見えています。子どもが遊んでいた時でボタンとこける、倒れる。「痛いよー、痛いよー」って言って泣いている。ああ、大変だ。泣いているなってお母さんが寄って言う言葉、足をパンパンってして「大丈夫、痛くない。」「大丈夫よ、痛くないよ、痛くないよ」ちつともこだましてないじゃないか。面白いでしょう。お分かりますか。「痛いよー」って言っているときに「痛いね」とか「痛かったね」と

か、子どもが言う言葉にそのまま返してあげるのが、こだまをするということ。そのように考えると、相手の言っていることを受け止めて、相手と同じような心情にたった言葉を返すということが、こだまをするということの本当の意味だろうと思いますよ。なのに、私たちは自分の判断で「そうじゃない」と思ったら、その考えはダメだぞという時には、こだまをせずに別の表現を持って返してしまう。「痛いよ」に対して「いや、大丈夫。そんなことくらい痛がつてはダメだよ」という思いを込めて、優しさで「痛くないよ」と言っているつもりでしょうけれども、それでは痛がつている子どもの気持ちを汲んだことにはならないじゃないか。こういう意味に取ることができます。よって、「こだまでしょうか」という言葉の裏側には、こだまをするということは相手と共感できるんだよ、ということが隠されているというふうに読み取らなくてはならないのかもしれない。この詩をつくった金子みすずが「星とたんぽぽ」という詩を書いています。

「星とたんぽぽ」

豊かな人間性を目指して

青いお空のそこふかく、  
海の小石のそのように、  
夜がくるまでしずんでる、  
昼のお星は目に見えぬ、  
見えぬけれどもあるんだよ  
見えぬものもあるんだよ  
ちつてすがれたたんぽぽの  
かわらのすきに、だアまって、  
春がくるまでかくれてる  
つよいその根は目に見えぬ  
見えぬけれどもあるんだよ  
見えぬものもあるんだよ

先ほど公園の話で、お母さんが自分の判断で「そうじゃない」と思うものに対して相手の言葉をこだませずに返してしまおうというお話しをしましたが、私たちはどうしても自分の判断、自分の考え、自分の目で見えたもの、自分で感じたものを優先してしまおうという性格というか本能があるようです。ここに書いてある言葉で非常に重要なのは、私たちの目に見えない周りにいろんなものがあるよということを金子みすずは見つけた。そのうちの一つが昼間のお星さまである。昼の星は太陽の光によって隠されているけれども、ちゃんとそこに星はある。日食になったりしたら星は出てくるでしょうね、そして見えるようになる。また太陽の光が出てくると遮られる。その太陽が西に沈んだ時、夜になって太陽の光が失われた時に星は出てくる。詩の第二連に注目してください。たんぽぽの花は春に咲いて、やがてわずかな時間で散っていきまます。わたぼうしになつて散っていきます。そうするとたんぽぽそのものは見えなくなります。根や種というのはちゃんと生命力を持って、冬を越えるとまた出てくる。「つよいその根は目にみえぬ 見えぬけれどもあるんだよ」というふうに言っています。この意味をちよつと記憶の中に留め置いていただけたらありがたいと思います。

豊かな人間性を目指して

次に紹介したいのが宮澤章二という人です。ご存じですか。あまりご存じないかもしれない。この人はですね、九十歳を超えるまで詩人として活躍されました。特に関東を中心に活躍され、北関東のほうでは三百校を超える学校の校歌を作られたり、青春とか、若者に勇気を与えるという詩をたくさん作詩されたりした老齢な詩人です。お年を取ってまでも若い気持ちをずっと持ち続けた詩人ですが、この人の詩がこれです。

「行為の意味」

—あなたの〈こころ〉はどんな形ですか  
とひとに聞かれても答えようがない  
自分にも他人にも〈こころ〉は見えない  
けれど ほんとうに見えないのであろうか

確かに〈こころ〉はだれにも見えない  
けれど〈こころづかい〉は見えるのだ  
それは人に対する積極的な行為だから  
同じように胸の中の〈思い〉は見えない  
けれど〈思いやり〉はだれにでも見える  
それも人に対する積極的な行為なのだから  
あたたかい心があたたかい行為になり  
やさしい思いがやさしい行為になるとき  
〈こころ〉も〈思い〉も初めて美しく生きる  
―それは人が人として生きることだ

これがこの人が作った詩です。このうちの一部分が抜き出されてキャッチコピーと  
なってコマーションシャルになっていたのをみなさんは記憶されていますね。電車の中で中  
学生か高校生ぐらいの男の子がたむろしてお話しをしている横で、妊婦さんが通って



豊かな人間性を目指して

くる。それを見ていた向かい側の女の人がパッと席を立つ。あ、僕も席を立つたら良かったのになとちよつと後悔した。その男の子が今度は石段のところ、おばあさんが一生懸命石段を上がって行こうとしている横をいったんは追い抜くんだけでも、もう一度戻って手を貸して背中を押そうとする。そういうコマースィヤルになっていました。「へこころ」はだれにも見えないけれど「へこころづかい」は見える」「へ思い」は見えないけれど「思いやり」はだれにでも見える」でありました。この宮澤章二さんの詩集の中に次のような詩があります。

「見えないものを」

枯れたように見えて

ほんとうは枯れない

枯れ野いっばいの草たち

どこかに種子もこぼれている

数えきれないほどこぼれている

ひとつひとつの種子に

かすかな身動きがある

ひとつひとつの身動きに

秘められた力がある

見えるものばかりに目をそそぐとき

残るのはむなしさだけではないか

薄ら日の真冬 北風のなかで

見えないものへの思いが深まる

―見えないものたちを信じよう

宮澤章二さんというのは先ほど申し上げたように、若者に勇気を与える詩ですか、若者たちが受験勉強で大変しんどい目をしているとか、あるいは就職活動で大変あくせくしているとか、そういう時でも今頑張って秘めている力をたくわえておけ、

豊かな人間性を目指して

そしてそれをやがて發揮できる時に、頑張っていけという応援の詩であろうというふうに読むことができますよね。しかし私が言いたいのはそんなことではなくて、先ほどの金子みすずのたんぽぽの詩と同じような意味内容がうたわれていました。一方で「星とたんぽぽ」という詩を書いた金子みすずの「こだまでしょうか」が流れ、また一方で「見えないもの」を書いた宮澤章二の「思いやりは見える」という詩がCMに流れた。偶然かという絶対偶然ではないと思います。この二人の詩人が共通して言っていたことが、震災後の日本に向けるメッセージとしては必要だということが込められている。そうすると、ああいう時期にああいうコマーションを流す中に、どんな精神が必要なのだろうかということを私は今日みなさんといっしょに考えたいと思つたのです。それが今日の題でありますところの「見えないもの“の不思議な力”ということになります。見えないものがこんな力を持つているのだということ二人の詩人が、同等に、同じ様な表現で、冬を乗り切る力だとか、人生の中で困った時の力だとかを、見えない力というふうに読んでいるのだと思います。

そこで次に、私が何故そのように「見えないものの力」というものに着目していったかという私自身の思いを私自身の言葉でみなさんに紹介したいと思います。意識をすることと、実際に起こったこととの関係をみなさんは考えたことがありますか。例えば、今仮に、「事故が起こった」と聞いたとしましょう。先ほど西大路を通過って来ましたが、「西大路五条のところこんな事故がありました」と仮に私が言ったとしますね。そうすると、その事故というのはみなさんが知った時点でみなさんには起こるのです。別の例をあげますと、私の母親が死んだという連絡を私が受けたとしますよね。そうすると私の母親は聞いた時点で私の心の中では死ぬのです。お分かりになりますか。この連絡が入る前は、私の母親は私の中では大事なお母さんとしてまだ生きていると信じているわけです。そのタイムラグ、ズレがあるということを、みなさんお分かりになると思います。実際に起こったことと、私が認知、覚知したこととのズレというもので、みなさん方はどちらが正しいと思って行動していらっしやいますか。間違いなくあなたが思った事のほうが大事だとして行動しているでしょう。そうでないと行動できませんから。だからよくみなさんは会話の中で「ええ、

豊かな人間性を目指して

ホント?」って言いますよね。ホントって言葉を返す裏には私がそれを覚知して、「ああ、そうなんだ」と自分の中で納得する作業を自分がしているわけです。その時点で事件や事故や事実というものは、自分の中でちゃんと起こったわけなんです。このように私は思っています。そうすると、普段、知っていることと、知っていないことがあったとしたら、みなさんが知っていないことは、存在もしていないし、起こりもしていない。「ない」のも一緒ということになります。

私は何を言いたいかということ、先ほど「見えないもの」に思いを寄せるという中で、自分が意識を持つということがどれぐらい大事なことから。宮澤章二さんが「薄ら日の真冬に見えないものの力を信じよう」と言っていました。それを本当に信じて思いを浮かべられる人ならば、枯れ枝に桜の花がいっぱい咲くだろうという春を夢みて、何て綺麗な桜が咲いていく枝なのだろうと枯れ枝を見ることができるということになりますよね。そのような自分の意識、自分の思いというものを、あなたが知っている、あなたが今まで経験してきた、会ってきた、そして覚えている、それがあなた

の世界の全てであるということになるのではないかと問いかけているわけです。

私は、自分自身のことをそうだと思っています。残念ながら私が読んでない本とか、私が行ったことのない国とか、そういうものについて、私は知らない。知らないということとは、私の意識の中にはないということとは、私が感知し得ていないということになって、「私の世界観の中にはない」のも一緒なのです。だから、なるべく多くの人と出会って話を聞いたり、多くの本を読んだり、多くのところへ出かけて行ったり、体験を通して自分の世界観を拡げていくことがどれくらい大事なことだろうというのを、みなさんにも知っていただけたらと思います。今までの人生の中で、二十数年または十何年生きてきた中で、自分が経験してきたことしか自分の頭の中には世界がないのだというのは事実だろうと私は思っています。これを、ああ、本当にそうかもしれないなあともなさんが思っていたくとしたならば、光華に来ている間にいろんな勉強をして世界を拡げてほしいと思います。それが私のお話ししている世界、つまり目に見えないものの力との関係の中の世界というものに繋がってくるという気がするわけです。

豊かな人間性を目指して

まともに入ります前に、ちょっと戻りまして、金子みすずがどんな世界を言っているかということを考えてみたいと思います。金子みすずの「大漁」という詩があります。これは金子みすずさんという詩人の代表作です。最も有名になった詩であります。

「大漁」

朝やけ小やけだ

大漁だ

大ばいわしの

大漁だ。

はまは祭りの

ようだけど

海のなかでは

何万の

いわしのとむらい

するだろう。

こういう詩です。まず前半の「朝やけ小やけだ 大漁だ 大ばいわしの大漁だ。はまは祭りのようだ」そこまでは大変面白い詩になっています。人間の世界においては大漁になる、魚がたくさん獲れるというのは生活が潤うし、家族が明るくなるし、みんな喜んで、漁師のお父さんが帰ってきた、「大漁だ」大漁旗が拵がっている。よかつたねってみんな喜び合う。ちなみに、今年は昨日のニュースで放送していました。値が、佐渡沖では寒ブリが大漁らしいですね。去年の何倍の量だと言っていました。値段も下がるので関西近辺ではお正月にブリがたくさん出回るでしょうって言っておりましたが、大漁というのはそういうふうには、人間社会においては幸福をもたらす、良いことなのです。ところが、「だけど」とあって、だけどから後半はいつぺん世界が



豊かな人間性を目指して

変わります。明るい世界からパッと暗い世界に変わって「海のなかでは何万のいわしのとむらいするだろう」海の中へ海中カメラでパッと潜ってみると、そこにはいわしの家族がいて、いわしの家族の中には「うちはお父さんが網に掛かってしまったよ」「うちはね、子どもたちが全部掬われてしまったのだよ」って言いながら悲しみのお弔いですから、お葬式をいっぱい出しているだろう、何万のお葬式が海の中では行われているだろうという詩になっています。ですから、金子みすずが「大漁」という詩で言おうとしていることというのは、明るい世界と暗い世界、表と裏の世界、そして考え方を換えれば、片一方、右側から見たとしたら、左側から見たものの見方、別のもの見方がちゃんとありますよということを言おうとしているのだと思います。喜んでいられる人があると思うと、悲しんでいる人があるということになる。よく幼児教育の中で、かけっこをして順番を付けるのはどうかという話がありますが、。順番は付きますよね。成績を出す時なんかそうですよね。あなた方だって成績をもらう時に順番は付きますよね。でもそれが悪いのではなくて、悪い成績をとったり、順番がビリになったりすること自体が悪いと決めること、そのことがいけないんだろうと思うの

です。別のものの見方をするということはそういうことであって、いろんな講話の中で、こんな話があります。「お母さん、また私かけっこでビリだったの」といった時に、お母さんが、「でもあなたは一生懸命頑張ったんでしょ。頑張ったならそれでいいじゃない。ビリがいるから四番の子がいて、四番の子がいるから三番の子がいて、三番の子がいるから二番の子がいて、一番の子がいる。みんなが一番になれるわけではないんだから、あなたが頑張ったんだからそれでいいじゃない」ということを言ったという話がありました。それを読んで大変感動したのですが、今申し上げているのは、片方のものの見方があると、もう片方のものの見方をちゃんとできる人間にならずに片手落ちということを言おうとしているのではないかと思えます。それが今度は三層構造になった話が「つもった雪」という話になります。

「つもった雪」

上の雪

豊かな人間性を目指して

さむかろな。

つめたい月がさしていて。

下の雪

重かろな。

何百人ものせていて。

中の雪

さみしかろな。

空も地面じべたもみえないで。

先ほど言いました漁師さんと獲られた鯛は二つの世界で、こちらから見たら、こちらから見たらという二つの世界でしたが、今度は三つのもの見方に広がっています。上の雪は空に向いていて冷たい月がさしていて寒いだろうな、外気に当たって寒

いだろうな。下の雪が重いだろうな、いっぱい雪が乗っていて、何百人もの雪が乗っていて重たいだろうな。ここまでは上下の関係で二つですよ。ところが金子みすずはもう一つ普通には考えられない中の雪に着目しました。「中の雪さみしかるな。空も地面もみえないで」上にも下にもいない、真ん中にあることだって同じように辛い部分があるだろうなと思いをいたしたという話です。三層目の構造が出ているということになります。そしてさらに広がりますと、これも三つと言えば三つなんですけれども、「わたしと小鳥とすずと」三つ以上のものを取り上げたとは私は理解して例として挙げました。

「わたしと小鳥とすずと」

わたしが両手をひろげても、

お空はちつともとべないが、

とべる小鳥はわたしのように、

豊かな人間性を目指して

地面じべたをはやく走れない。

わたしがからだをゆすつても、

きれいな音はでないけど、

あの鳴るすずはわたしのように

たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、

みんなちがつて、みんないい。

ここでは、私と小鳥とすずの特徴を挙げて、私にできるものが小鳥はできないとか、私ができることは鈴はできないとか、鈴ができることは私にはできないとか、それぞれに言いながら最終的に「みんなちがつて、みんないい」と言っていることをあわせると、スマップが歌った「世界にひとつだけの花」によく例えられるように、それぞれ

れがそれぞれに良いところがある、それぞれの特徴があると言った点においては、これは三層構造ではなくて、多層構造に着目した詩だということが言えると思います。このように、今、皆さん方にお伝えしたいのは、自分がいろんな思いを抱いている、見えないものに思いを抱いていくという時に、いくつの立場から、いくつの角度からものが捉えられるかということを考えていただければ、人間性が間違いなく広がると思います。自分自身もそのようにしたいと思いつつながら、なかなか実際にはできない自分がいるのですが、あなた方には是非、そういうことは感覚的に考えてみるように取り組んでいただけたらありがたいなと思つて、この詩を用意してきましたわけです。言葉を換えますと、あの人はどういうふうなことを今望んでいるだろうか、こつちの人はどういうことを望んでいるだろうか、私のいる立場でどういうことが私にできるだろうか。私ができる範疇のことを見たときに、あの人や、この人や、その人や、周りにいる人たちは、私に何を望んでいるのだろうかということを、自分で慮れるような感性というか、心配りというか、そういうものがみなさんに芽生えていてしょううかというところをお伝えできれば、私の役目は終わるのではないかなと思つています。

豊かな人間性を目指して

最後に釈迦仏の存在ということを申し上げます。仏教の經典の中からちよつとだけそういうお話しをさせていただきます。みなさん方は、お寺へいらした時とか、仏さまというものをどんな存在だと思つて捉えていらつしやいますか。例えば仏さまに手を合わせて拝むということ、仏像に対してそのようにするということは、そこに仏さまがいらつしやるということを信じているということになりますよね。信じなければ手を合わさないとしよう。お釈迦さまという存在を、光華大学で、仏教関係の授業で必ず習つていらつしやると思ふのですが、どのようにみなさん方は理解されていますか。普通一般には、今から二五〇〇年ぐらい前にインドから少し外れた現在のネパール領になるカピラ城の王子様として生まれて…とか習いますね。そして八十歳ぐらいの生涯の中で、悟りを得て、それを仏教として弟子たちに語り、それが現在の仏教の教えになつて世界に広まつていつている、その基を築かれた、インドで暮らし、インドで亡くなられた方のことを釈迦という、それを釈迦の生涯というのです。ところがお寺へ行けば釈迦仏という仏像があつて拝みます。そうすると、釈迦牟尼仏という仏像は、今そこにいるのか、そういう問題になります。インドにいた人間釈迦ということも

のを説明している段と、それから人間を超えた仏、仏陀という存在が今も続いているというその流れの中で、仏像にその釈迦の精神、釈迦の命が宿っていて仏像として存在している釈迦に手を合わせるという、重層構造になっているわけなんです。そのことを理解しないと、釈迦の木像に手を合わせて「お釈迦さま」と拜んでおきながら、お釈迦さまは八十歳でインドで死んだと習って、それを習った通り信じているというのは、内部矛盾、あなたの中で自己矛盾を起こしていることになりすよね。ですから、それとそれとをつなぎ合わせて考えた時に、(今日お話ししてきたことが役に立つかどうか分かりませんが) 自分自身が納得がいくような考え方に立脚した生き方が、できなくてはならないと思うのです。それは私が今申し上げたように、インドにいらしたお釈迦さまの精神が日本では、例えば阿弥陀さまなどでもそうですが、「南無阿弥陀仏」と書いてあったお軸に、その精神が宿っている、そういうものを通して阿弥陀さまのお力、お働きというものを自分が感謝するという思いでお軸を見なぐちゃいけないだろうし、仏像に対してもそういうことが必要ではないかと思いません。



豊かな人間性を目指して

今日の話はどういうことを申し上げてきたかと言いますと、私の周りにある実感できるものに、みなさま方は「おかげ」、有難いんだと感じている部分がどれぐらいあるでしょうか、ということになります。「へこころ」は見えないけれど「へこころづかい」は見える。「思い」は見えないけれど「思いやり」は見える」というふうに宮澤章二は言っていたように、みなさん方はそれを実際に見ていますか、こういう話に最後はなってくるわけです。「今日お昼何召し上がりました？ どこで食べました？ 誰が作ったものを食べました？ どこから来た食材のものを食べました？」それらがあなたの口に入ることがどれくらい尊いことだということを感じて召し上がっていますか。例えば一つ例を取ればそういうことになります。「私の周りにある実感できるもののおかげ」というものを感じてくださいというんだけども、実感してなければ何もならない話です。コンビニ行って、〇〇買って食べた。「これもうひとつやったなあ。こっちの方が美味しかったで。」それでおしまいになっちゃうのかと。みなさん大概是今日話したようなことは思う時間もないし、あんまり考えようともしないのではないのでしょうか。けれども、そういうことをちよつと立ち止まって考えたら、

143

「あ、本当にそうだなあ」と。食堂で並んでいるもの、おうちへ帰った時に、お母さんが作ってくれたものを食卓をみんなを取り囲んで食べている時でも、食べ物一つとっても、それが一体どこからどういふふうに周りまわって来た食材であつて、それが料理されるまでにはどんな苦労があつて、ということを考えたら、本当にもののおかげによつて私が今、暮らせているんだなあということを知ると思います。みなさんが着てらっしゃるものをとつてもそうですね。みなさんが持つていらっしゃるカバンの中を開けても、そういうことが全部、一つ一つ詰まっていると云えます。そういうもののおかげ。それは、今見えているものだけでも、その見えているものをずっと考えていけば、目に見えないものを含めたもののおかげに広がっていきますよということ、今日は申し上げてきたわけです。「見えないものの不思議な力」というのはそういうところへいきます。

ティク・ナット・ハンというベトナムのお坊さんがいます。この方が仏教の縁起の話「空(くう)」の話を説明するのにこんな例えを使っています。「あなた方は紙を使いますか。」レジメを見たり、ノートを使ったりしますよね。「この紙を見た時に、あ

豊かな人間性を目指して

あなたは木こりがパンを食べているところが目に浮かびますか。」そういう記述で話を進めていきます。木こりが、木こりの家でパンを食べる。そして木こりの奥さんに言います「美味しかったよ」と。「じゃあ、仕事に行ってくるよ」。そして、木こりは森へ入って行って、コーン、コーン、と木を倒します。その木が切り出されて、木からチップが取れ、パルプになって、紙の材料となります。それで紙が製造されて行って、最終的にあなた方の使っている紙の繊維になって、今、あなたがそこに持っているその紙です。その紙にそれが宿っています。そうすると、その紙を通すことで、木こりのコンコンという音や、パンを食べてたパンの香りがあなたにしますか。というふうにテイク・ナット・ハンは言うわけです。これはまさに今日申し上げてきた、目に見えないものを含めたもののおかげ、というものに目を開いていますか、耳を開いていますか、鼻を開いて匂いをかいでいますか。そういうことに繋がってくるような気がします。自分の知らないところに不思議な力がある。それを仏教では「因」とか「縁」とか言うのでしょうか。そしてその結果として、今一番良いところだけを、すつと上澄みを掬わせて暮らさせてもらっているのだけれども、そこにそういう蠢く力うごめが

あるんだということを、みなさん方には是非知っていただけたらありがたいなあと思います。ここの部屋を出ていく時も周りを見渡してみると、いろんなところにお陰が眠っているということに、気が付くだろうと思います。私も本来、京都光華女子大学に呼んでいただくような立場では全くないと思っています。今日は兵庫から電車に乗って来たわけですが、どうして私がここに立っているんだろうかと考えた時に、本当に目に見えないいろいろな不思議な関係があつて、そして、そういう中でみなさんと初めてお目にかかつて、一体誰が何でここでしゃべっているんだ、私は何でここで聞かないかんの？と思いつながらイスに腰かけてらっしゃる方がたぶんあると思うのですけれど、それが今、今日お話ししてきた、目に見えない不思議な力ということに、おそらくなるのではないのでしょうか。私が申し上げたことは、多分に人様の力を借りて、金子みすずさんの力を借りて、宮澤章二さんの力や、ティク・ナット・ハンというお坊さんの言われた言葉の力を借りて、みなさんにお伝えをしました。それは今の時流の中で、東日本大震災が起こって、多くの方たちが目にして耳にして感じられる素材として眠っていたものですから、それをあなた方にお伝えできる中で、今日言っ

豊かな人間性を目指して

た言葉のいくつかをあなた方は見ていたはずですよ。そして聞いていたはずですよ。それに対して「ああ、そうなんだ」と改めて感じていただいで、その言葉の裏にある力を改めて感じていただきたいと重ねて申し上げて、終わりにさせていただけます。ご静聴いただいでありがとうございます。

——二〇一一年十二月九日——